



人生を変えた一冊

経済学部長 小 棚 治 宣 (教授 社会保障論)

学生時代にどのような本と出会えるか、あるいは質と量の両面で、どの程度の読書が出来るかで、その後の人生が大きく変わってくる—と私は考えている。あの時、あの本に出会ったから、今の自分がある、そんなふうに見える「人生を変えた一冊の本」に、もし大学生活四年間で出会えたとしたら、これ程素晴らしいことはないのではなかろうか。

本との出会いは、偶然もかなり作用するので、スリリングでミステリアスな面もある。異性との出会いあるいは生涯の真の友との出会いに似たところがあるかもしれない。

だが、出会える場所にまず自ら足を運ばなくては、そもそも「出会い」のチャンスは訪れない。その点、経済学部のある三崎町・神保町周辺は、大型書店や古本屋、図書館等の「出会いの場」が、日本一豊富な地域と言っても過言ではない。

私も学生のころ、こうした恵まれた環境を利用して多くの本にふれた。それらの出会いがあったからこそ、今の私があるのだと思っている。大学へ入学した直後、小説の好きだった私は、せっかく時間があるのだから読んだことのない作家の作品をできるだけたくさん読んでみようと考えた。将来、自分でも小説を書いてみたいという夢をもっていたからだ。だからといって、『近代日本文学全集』のようなものを読破する気にもなれなかった。そこで、本屋でも図書館でもいいから作者の五十音別に並んでいる棚の前に立って、「あ」から順に気になる作者の本にふれてみようと考えたのだ。読んでみてつまらなかったら別の「あ」の作家の本に変える。ただし、一週間したら「い」に移る。こうすれば、ほぼ一年で「あ」から「わ」までの作家の本にふれることができるわけである。

だが、何ごとも計画通りには行かないもので、気に入った作家に出会ってしまうと、その作家のものをたて続けに夢中になって読んでしまう（私は凝り性なので）ため、一週間で次の作家には移れなくなるのだ。辛うじて「わ」に行き着くまで二年半かかった。だが、今思うとこうした方法をとらなければ出会っていなかった作家や本は数多い。

その中の一冊が、吉村昭の『日本医家伝』（講談社文庫）であり、『冬の鷹』（新潮文庫）である。前者は、日本の近代医学の創生期（幕末～明治時代）に、貢献した医師たちの苦悩のあとを描いたものであり、後者は杉田玄白とともに『解体新書』の翻訳を行なった前野良沢の学問に対する無欲で厳しい生きざまを活写したものだ。

これらの本との出会いが、私に医学史や医療の発達史に関する興味を抱かせ、その後も『日本医家伝』の中で紹介されていた日本最初の公認の女医、萩野吟子の生涯を描いた渡辺淳一の『花埋み』（角川文庫）などを読むことで、福祉への関心も芽生えていったと言える。それが、社会保障論を専攻する内なる動機の一つとなったことは間違いない。

また研究者の道を歩む途上で常に力づけられたのは杉田玄白の『蘭学事始』の中で語られるオランダ語の解剖学書を辞書らしい辞書もない時代に苦心さんたん惨愴しながら解読していく場面である。徹すれば必ず壁は破れることを、当時ドイツ語の文献を前に四苦八苦していた私に教えてもくれた。

このように、一冊の本との出会いは、次の一冊へと導いてもくれるのである。さあ、諸君も、図書館でも本屋でも、どこでもいい、未知の本が並んだ書棚の前に立って、まずは一冊の本を抜き出してみたい。その偶然の出会いが、人生を変えるかもしれないのだ。

最後に、私はまだ、小説を書く「夢」を持ち続けていることを付け加えておきたい。